

共に生きる心をもって

「チヨンスギ！ チヨンスギ！」

父と母の必死に私を呼ぶ声に応えることもできず、私は今までに経験したことのない激しい揺れの中、痛みも忘れて足の上ののったテレビをどけると、とにかく外へ出なければと、階段をかけ降りました。しかし、私はそのとき、まだ、これが一瞬にして五千人以上の人々の命を奪った大地震だと、夢にも思っていないませんでした。

私の住む尼崎で、神戸や芦屋、西宮の惨状を知ることができたのはテレビの画面でした。刻一刻と写しだされる様子に、私は心の中が真っ暗になりました。私の通う朝鮮学校には、西宮や宝塚から通う生徒も大勢いるのです。そして、もうひとつ私の心を横切ったのは、以前、学校で聞いた関東大震災のことでした。地震の後、「朝鮮人が井戸に毒を入れた。」とか、「家に火をつけている。」というデマのせいで、罪のない数千人の朝鮮の人たちが虐殺された事件です。

しかし、私のそんな不安は、十日後に、ようやく再開された学校で打ち消されました。学校には、校舎の全壊した神戸の朝鮮学校から、多くの生徒たちが臨時転校してきていました。私は、クラスに転入してきた友達とすぐに仲良しになり、地震ことや、その後の電気も通じず、水もでない大変なくらしを聞くことができました。避難所になった学校の体育館では、日本人も朝鮮人もわけへだてなく、みんな役割を分担して協力しあっていることや、朝、チヨゴリを着て学校へ行くときに、日本のおじさんやおばさんから、「いつてらっしゃい。」とか、「がんばつといでや。」と声をかけてもらったのが、すごくうれしかったこと。そして、何よりも私が驚いたのは、今まで、何十年も目の前にある

朝鮮の学校に足も踏み入れたことのなかった近所の日本の方々、地震後、すぐ開放された朝鮮学校に避難し、今では、親せき以上に親しくなり、いっしょに助け合っていることでした。

私にも何か役に立てることはないだろうかと、友人たち、さらに母にも相談しました。その結果、避難所から通う友人たちのお弁当をみんなで分担して作ることにしました。母は、近所の避難所に配るおにぎりやキムチを多くのオモニたちと徹夜で作って持つていきました。男子は、みんなで集めた救援物資を自転車に積んで神戸まで運んでいきました。それは、ボランティアという程のものではありませんが、人を助けてあげるといっても、みんなの笑顔が見たいから、そして、そのほほえみが自分の心を温かくしてくれるからです。

私の学校にも、毎日のように全国の同胞たちだけでなく、日本の人たちから救援物資が届きました。奈良の幼稚園から送られてきた筆箱の中には、かわいらしい字で、「じしんにまけず、がんばって。」と大きく書かれた手紙がはいつていました。去年、私の学校の女生徒もチヨゴリを着ていると、石を投げられたり、いやがらせを受けたりするという事件が相次ぎました。しかし、その時も、多くの励ましを下さつたのは日本のみなさんです。そして、今度の地震でも、私たちは日本のみなさんから多くの貴重なことを学びました。

人間を助けられるのは、人間しかいないということですが、私の心の中にしつかりと根をはつています。違うからといって避けたり遠ざけるのではなく、共にこの社会に生きる人間として違いを尊重し、自分のできることから助け合い手を取り合っていく、そういう社会を築いていくこと。そのためにも、もつともつと多くのことを積極的に学び、体験していこうと思います。共に生きる心をもつて、みんなで歩いていきましょう。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。